

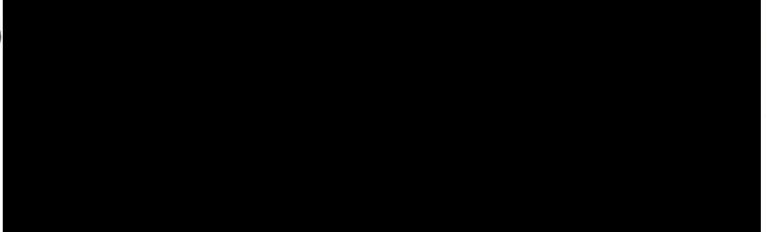
甲第38号証

陳述書

2023年10月28日

東京地方裁判所民事第25部甲B係 御中

(氏名)



原告を私、被告を東京都とする損害賠償請求事件につきまして、以下のとおり述べます。

1. 私について

私は、2011年に祖国から来日して以来、ずっと日本に住んでおり、イスラム教を信仰しています。

今回の裁判で問題となっている事件（以下「事件」といいます。）の当時は、事件のあった公園の近くに住んでいました。

事件当時、長男（以下「長男」といいます。）は8歳で、長女 [REDACTED]（以下「長女」といいます。）は3歳でした。

これからお話するのは、事件の際の、最寄りの警察署の職員から受けた非人道的且つ差別的な扱いについてです。

2. 公園で巻き込まれたトラブルについて

私は、2021年6月1日の午前11時半頃、長女を連れて公園に行きました。私と長女はまだ昼食を食べていなかったのですが、長女がどうしても遊びたがったので、少しだけ遊んでから帰って、昼食にする予定でした。

長女ははじめ一人で、砂場で遊び、それから砂場のすぐそばにある、すべり台で遊んでいました。私は砂場近くのベンチに腰かけて、長女をずっと見ていました。そのベンチは、砂場もすべり台も良く見通すことができる場所にあります。長女が砂場で遊んでいる時に、姉から電話がかかってきましたが、公園にいるので、後でかけ直すと言ってすぐに電話を切りました。もちろん電話をしている間も、長女から目を離していません。すべり台では、長女の他に日本人の小さな男の子が遊んでいました。長女は何回もすべり台を滑っていましたが、男の子に接触するようなことは一度もありませんでした。

午後1時10分頃だったと思います。長女が初めに階段をのぼり、滑ろうとしたところで、男の子はまだ階段の途中にいるのが見えました。長女が滑り終わったところに、突然日本人男性がものすごい勢いで、長女の近くに来て、大きな声を出し、長女の肩口辺りを押したので、長女はふらつきました。私はびっくりして、すぐにその場に駆けつけ、その男性から長女を守るようにしました。

私は日本語がほとんど分かりませんが、男性は、すごい剣幕で、「ガイジン」と繰り返して、「ザイリュウカードダセ」などと言っていることは分かりました。その後のやりとりで、その男性は、すべり台にいた男の子の父親だと分かりました（以下「訴外男性」といいます。）。

私は、なぜ訴外男性がそのように怒って、大声を出したり長女に暴力

を振るったりしたのか、はじめは全く意味がわからず、理由を聞こうとしましたが、言葉が通じませんでした。そのうち、訴外男性は私にも向かってきて、叩こうとしました。私は驚いて、「Please call the police」と言いながら、公園の出入口の方向に長女を連れて走って逃げました。出入口のそばには守衛さんがいたので、助けてほしいと伝えましたが、どうにも伝わりませんでした。

私は、混乱してどうしたら良いか分からず、当時いつもお世話になっていたケースワーカーの [REDACTED]さん（以下「[REDACTED]さん」と言います。）宛に電話をかけました。私の携帯に残っている発信履歴によると、その日の午後1時17分のことです。

すると、訴外男性が追いついてきて、私の手から携帯電話を奪い取ると、電話に向かって怒鳴り始めました。その頃、その場に偶然英語が堪能な男性が近寄ってきてくださり、訴外男性と私の間に入ってくれました。

日本語が分からない私でも、その雰囲気から差別的なことを言われていることが分かりました。

3. 公園に集まった警察官たちの状況

私が、英語を話せる男性と話していると、2人の制服を着た警察官が自転車でやってきました。訴外男性は、警察官たちに大声で何かを説明していました。

そのうち、制服を着ていない、2名ずつ2組の警察官も公園にきました。その場には、結局6名もの警察官が来ていたことになります。どうしてそんな数の警察官が来なければならなかったのか、今でも理由が分かりません。

集まってきた警察官たちに、訴外男性は大声で説明を繰り返しているようでした。私は、通訳して下さる男性を通じて、警察官に長女は蹴っていないのだということを説明しましたが、取り合ってもらえませんでした。長女が指をして、警察官に何かを説明しようとしたのですが、その警察官は、長女の手を押し下げて、話を聞こうとしませんでした。

私が、警察官にI don't knowと伝えたのは、訴外男性がなぜ怒っているのかがわからないという趣旨です。東京都が主張するように、滑り台の上の状況がわからないという意味でI don't knowと言ったことはありません。

訴外男性は、日本語で、差別的な言葉を使って、自分の都合の良い説明をしているようでした。しかしながら、訴外男性の息子さんが怪我を

している様子はなかったですし、訴外男性も、訴外男性の奥さんと思われる女性も、その場にいた警察官たちも、誰も訴外男性の息子さんを気遣っている様子もありませんでした。何か跡があったのなら、それを確認すればよいと思いますが、確認している様子はなかったですし、もちろん写真を撮ったりもしていません。

訴外男性は、大声を上げて行ったり来たりしていて、ずっと失礼な態度でしたが、その場には6人の警察官がいましたが、訴外男性を咎める警察官は一人もおらず、ただ、それを見ているだけでした。

1時間くらいその場にとどまっていたでしょうか、私はどうにも收拾がつかないことを再度 [REDACTED] さんに電話でお伝えしています。午後2時27分のことです。

その頃、警察官から、長女と一緒に警察署に来るようになるとと言われました。なぜ、警察署に行かなければならぬのか、説明はありませんでした。英語のわかる男性を通じて、家に帰りたいと伝えてもらったのですが、許されませんでした。

東京都は私が「帰りたい」と言っていないと主張していますが、絶対言いました。

当時、私は本当に怖くて、混乱していて、逆らうことなどできませんでした。私は長女連れて、言われるがまま、警察の車の後部座席に乗るしかありませんでした。せめて先ほど通訳して下さった男性に警察署まで来て頂きたかったのですが、それも許されませんでした。

東京都は、私が警察署に行くことを了承したといっているようですが、事実と違います。帰りたいと言っても許されず、車に乗るように言われたので、警察に逆らうことはできませんでした。警察から求められたことに応じる義務がないと分かっていたら、車に乗ることはありませんでした。

私は [REDACTED] さんに電話をして、警察署に行かなければならぬので、通訳を探してくれないかと頼みました。発信履歴によると、午後2時54分のことです。

4. 警察署で私が受けた非人道的、差別的な扱い

私達が車で警察署に着いたとき、私達は喉がからからでしたので、警察署にあった自動販売機で水を買いました。その後すぐに、確か警察署の3階あたりに連れて行かれ、その奥にあった部屋に通されました。

部屋には机が一つあって、一方に椅子が2つ、もう一方に椅子が1つありました。私達は椅子2つの側に座るように言われて座りました。部

屋のドアは開いていましたが、部屋の入口付近には3人の警察官がいて、私達とドアの間に2人の警察官が立っていましたので、私がドアから出ることは物理的に困難でしたし、精神的にも警察官に囲まれてとても恐ろしく、ただ座るしかありませんでした。座った私達の向かい側の椅子に、担当だと思われる警察官が座りました。とても怖い表情をしていたのを覚えています。私達を囲む警官は、その後2名増えたので、最大5人の警察官に囲まれたことになります。本当に怖かったです。

私の携帯電話の着信履歴によると、午後3時26分、[REDACTED]さんから通訳は用意できないと電話がありました。警察からも、外部からの通訳は付けられないというような話で、事情聴取は、電話で繋がっている通訳を介して行うということでした。なお、私は英語も話せますが、母語は[REDACTED]語です。母語での通訳が必要かは確認されていません。

担当の警察官は、長女が男の子を蹴ったことを前提にして、それを認めるように何度も同じことを聞いてきました。公園での私について「(長女が) 蹊ったところをみたでしょう?」と聞かれたので「そんなことは起こっていません (It never happened)」「私はずっと娘を見ていました。」と説明しましたが、わかってもらえませんでした。私も長女も、長女は蹴っていないと繰り返し説明しました。

東京都は、私が滑り台の上の状況を「わからない。」「見てない。」と答えたと主張しているそうですが、全くの嘘です。もしも、私が「長女を見ていなかった」とすぐに答えたとしたら、それ以上説明のしようがないのですから、事情聴取はあんなに長くならなかつたはずです。私がはっきり蹴っていないと言い続けていて、担当の警察官は、執拗に、長女が男の子を蹴ったと認めさせようとしたから、事情聴取の時間が長くなつたのです。

取り調べ開始から1時間くらい経ったころ、警察から、長女を一人だけ残し、私は部屋から出していくようにと言わされました。複数の警察官に囲まれて、大人の私でも恐ろしい場所に、3歳の長女を一人で置いて離れるなどできないと思いましたが、担当の警察官は出していくようにと厳しく言いましたので、私は逆らうことができませんでした。私が部屋の外に出ると、部屋のドアは閉められました。

私はどうしたら良いか分からず、また[REDACTED]さんに電話をかけました。私の携帯電話の発信履歴によると、午後4時23分のことです。担当警察官は電話をかけている私に向かって何か日本語で言っているようでした。長女が泣く声も聞こえてきたため、私は一生懸命[REDACTED]さんに状況を説明しました。

そのうち、長女がもっと大きな声で叫ぶように泣く声が聞こえました。私が部屋を出て10分は経過していたと思います。長女の泣く声を聴いて、私はこのままではいられないと思い、勇気を出して長女がいる部屋のドアを開けました。長女は泣きはらした真っ赤な目で私を見ました。私は胸を締め付けられる思いでした。警察官は「誰に電話した?」と聞いたので、私は「[REDACTED]さんです。」と答えました。これを聞いた担当警察官は一度部屋を出ましたが、すぐに戻ってきました。

担当警察官はあらためて、長女が男の子を蹴ったのだろうと聞いてくれるので、私は、長女は男の子を蹴っていないし、私は長女の様子を見ていたといいました。しかし、その担当警察官は、「アイ ビリーブ ヒム」「ヒー イズ ライト」とだけ、英語で私に話しました。担当警察官はそう言うものの、事情聴取の間、何も資料や証拠は示されませんでした。どうして、警察は、訴外男性の言い分だけ信じたのでしょうか。今でも分かりません。

警察署に連れてこられてから2時間近くが経ち、私達は体力的にも精神的にも限界でした。私は、担当警察官に、長女は、昼食も食べていない、自宅に帰してほしい、と伝えましたが、聞き入れられず、私達が認めるまで、帰さないという様子でした。長女は「家に帰りたい。」と言って泣いていました。

また、私達はトイレに行くことも許されませんでした。当時、長女はまだオムツを付けていました。私が、彼女のオムツをかえてあげたいのでトイレに行かせてほしいと言っても、トイレに行くことは最後まで許されませんでした。

長女がぐずっているので、私は、「she is tired, sleepy, hungry」と訴えましたが、聞き入れてもらえませんでした。

担当警察官から別の部屋に移るように言われて、私と長女は部屋を移りました。しばらくして、担当警察官がやってきて、「携帯電話番号を(訴外男性に)教えることを了承しないと帰れない。」と言いました。私は、私と訴外男性とで直接話すように、という趣旨だと思いましたが、私は訴外男性に話すことなど何もありませんし、言葉も通じないので電話では話せませんから、これを断り、早く私達を帰らせてほしいと頼みました。担当警察官は「オワラナイ」と繰り返し言いました。私は日本語が分かりませんが、あまりに何回も言ったので、よく覚えていました。また、もう1人の少し英語が話せる警察官からも、私の電話番号を訴外男性に伝えることを了承するように言われました。

私には軽度の知的障害を持つ長男がいます。当時、長男は小学校が終

わってから、放課後デイサービスで預かってもらっており、そのデイサービスが終わる時間が午後5時30分でした。私は、もう長男を迎えて行かなければならぬと担当警察官に言ったのですが、電話番号を教えるまでは「オワラナイ」と言って、帰してくれません。私は仕方なく、デイサービスのスタッフ（以下「スタッフ」といいます。）にメールで、長男を警察署まで送ってきてほしいと頼みました。私の携帯電話に残っているメールの送信履歴だと、午後5時36分のことです。

送ってきてもらった長男と合流するため、私はその場をどうしても離れたく、担当警察官に、あらためて、家に帰してほしいと言いましたが、許されませんでした。私は最後まで、決して、電話番号を教えていいなどは言っていません。教えていいとは言っていないのに、警察が訴外男性に私の名前や住所まで教えてしまったと弁護士さんから聞いて、大変驚いています。

私は、長男が来るのを警察署前で待ちたかったのですが、なぜかそれも許されず、私と長女はスタッフが長男を連れてくるまで、事情聴取をされた部屋の近くで待たされました。理由は特に言われませんでした。その場を動かないようにと言われたので、トイレにも行けませんでした。

その後、スタッフが到着し、やっと解放されて家に帰ることができるようになり、警察署を離れました。自宅に着いたのは、8時近かったと記憶しています。

なお、裁判を起こす前、事件から間もないころの苦情申出の準備のときは、被害から時間が経つ前が良いと言うことで、急いでいたのと、専門の通訳の人もいなかつたので、弁護士たちと今ほどコミュニケーションがうまく取れていなかつたこともあり、電話番号を伝えることを了承したかどうかの点で、私の話が間違って伝わってしまった部分については、裁判で訂正しました。

5. 長女が被った精神的苦痛

6月1日の一件の後、長女は夜中に度々起きてグズるようになります。昼間も、「そこにMad manがいる」とか、担当警察官のことを「He is bad man」と度々私に言って、「スパイダーマンが助けてくれるよね？」などと私に聞くようになりました。

6月7日になって、警察署の「[REDACTED]さん」という警察官から電話がかかってきて、英語で、警察署に来るよう言われました。私は、別件で依頼していた西山弁護士に警察署に一緒に行ってもらえないかと頼

み、6月10日に西山弁護士と一緒に警察署に行くことになりました。

6月10日の朝、長女に「今日は警察署に行くのだ」と説明すると、長女は驚いて「No, I don't want to go.」といって、グズり始めました。当時は、長女は保育園に通っておらず、私が警察署に行くためには、どうしても長女を連れて行かなければなりませんでした。そこで、西山弁護士に、長女が行くのを嫌がっていることや、6月1日の出来事以後の様子を話したところ、すぐに精神科のクリニックへ行った方が良いと教えてもらいました。

早速小児専門の精神科の医師に診てもらったところ、長女が6月1日に体験したことは、3歳の彼女には大変なことで、不眠になっているのもそれが原因だと考えられるとのことでした。頂いた診断書には、「不眠（心的外傷エピソードによる）」と記載されています。

長女は今でも感情的な起伏が大きく、精神的に不安定な状態が続いています。長女をこのような目に合わせた、訴外男性と警察官らを許すことはできません。

6. 児童相談所への通告

西山弁護士が担当警察官に聞いたところによれば、訴外男性はその後、男の子が怪我した旨の診断書を提出したそうです。そして警察は、長女が男の子を蹴ったことを前提に、私が長女をきちんと監督していかなかったということで、児童相談所にその旨を通報すると言ったそうです。

実際、私のところに児童相談所から連絡があり、児童相談所に呼ばれて事情聴取を受けました。きちんとお話しましたので、それ以降は、今まで児童相談所から連絡もありませんし、もちろん指導を受けたこともありません。

繰り返しになりますが、当時、私はずっと長女を見ていきました。長女は男の子を蹴っていません。それなのに、なぜ警察官は、私を虐待している親のように扱ったのでしょうか。今でも納得できません。

7. Twitter（現「X」）への誹謗中傷の書き込み

それからさらに数日後、西山弁護士からの報せで、訴外男性と思われるTwitterアカウントから、私と長女の顔写真付きで、「長女が男の子を蹴ったので男の子がすべり台から落ちかけた」というようなツイートがされていると聞きました。

私は早速そのアカウントを教えてもらい、一連のツイートを確認しま

した。投稿されている写真は、私の写真と砂場で遊ぶ長女の写真、そして途中で間に入って通訳をして下さった男性の写真に間違いありませんでした。

その当時、現場となった公園は私達の当時の自宅から近く、子ども達を連れてよく遊びに行っていましたが、私達の他に外国人を見たことはありませんでした。また、地域のスーパーなどに買い物に出かけても私達のような姿の方は見かけません。そして、私はいつもカラフルな民族衣装を着て、イスラム教を信仰しているため、頭にはいつもヒジャーブをしており、公園やスーパーの中ではとても目立っていたと思います。私が当日付けていたビビットなピンク色のマスクも、当時よく使っていたもので、周囲の人々の印象に残りやすかったと思います。長女は外で遊ぶときには、いつも写真のような赤い帽子をかぶっていました。

このように、私達は、地域でとても目立った存在だったので、その地域の方があのツイートを見たら、男の子が長女に「殺されかけた」かのように思われてしまうでしょう。

さらに、ツイートによれば、私の名前も住所も知っている訴外男性は、私の出身国の大使館に苦情を入れたようです。一連のツイートは、私の在日同国人コミュニティーでの名誉を傷つけるものもあるのです。

その後、訴外男性は、私の本名や居住地区もツイートしていました。このような異常なツイートを繰り返す訴外男性に、私は名前も国籍も住所も電話番号も知られているので、今後何が起こるのかとても心配で、毎日恐怖を感じていました。結局、恐怖に耐えかねて、私は引っ越しを余儀なくされたのです。

8. 裁判所へのお願い

繰り返しますが、私の長女は、訴外男性の息子さんを蹴ったことはありません。そして私は、警察の方に初めから最後まで、そのように説明しています。

私達が訴外男性の異常な言い分を認めなかつたからこそ、私たちはあんなにも長時間、拘束されたのです。

公園から数えれば、ほとんど5時間くらいの間、私の長女は犯人としての扱いを受けました。

公園には、すべり台を映す防犯カメラはありません。男の子が6月1日当日、診断書どおりの怪我をしていたのかも確認できません。

どうして、警察は、長女が蹴ったと決めつけたのでしょうか。

どうして、警察は、訴外男性の言い分だけを信じたのでしょうか。

どうして、私たちは、あんなに長い時間拘束されなければならなかつたのでしょうか。

どうして、長女は、あんなに傷つかねばならなかつたのでしょうか。

裁判所におかれましては、このような警察署及び担当警察官の非人道的、差別的な対応に対し、厳正な処分をして頂きたく、お願い申し上げます。

以上